

今回は、「肯定的注目」をテーマに講義とグループワークを行いました。

相手を「ほめる」という関わりに絶大な効果があることは誰もが知っていることです。視点を変えて、皆さんも今まで自分自身が相手に「ほめられた」時を思い返してみてください。リアクションの強弱や照れは個人差があっても嫌な気持ちにはならず嬉しい気持ちになったと思います。

「ほめる」は、職場・家庭・学校・我々のような放課後等デイサービス事業所による療育現場など場所を問わず様々な対人関係の場面において、とても有効な関わり方の1つです。

しかし、この誰もが有効と分かっている「ほめる」という関わりが中々出来ない。頭では分かっているが、目の前の子どもの言動、常に時間に追われている状況、自分の気持ちに余裕のない毎日によって冷静になることが出来ず、「ほめる」ことを忘れ「怒る」などの否定的な関わりになりがちです。

また、「ほめる」に対するハードルの高さも高い壁となっています。当たり前のことをしてもほめない。「ほめる」に値する行動をして初めて「ほめてあげようかな」という気持ちになる。つまり、特別なこと(100点をとる・全部自分一人で取り組む・大人の都合に合わせる・・・)をしない限りは「ほめない」ということです。

「ほめる」が中々出来ない理由は実は明確にあるのです。

そこで、今回の研修では、上記のような「ほめる」が出来ない理由を具体的に見つけていき、その対応策として「ほめる」を「肯定的注目」に置き換え、日常の場面で継続して実践できる関わり方を話し合っていました。

発達特性を持つ子どもたちへの支援のポイントは、子どもへの要求課題のハードルを下げる事と同時に大人側(親・教師・支援者)の関わり方のハードルも下げることです。無理難題を背負っても絶対に続きません。

「ほめる」も同じです。

「肯定的注目」を使って、より簡単により継続的により前向きに関わり、子どもたちの意欲を上げ続けていくことが何より大切です。

